

会話におけるストーリーの共創

植野 貴志子*

東京都市大学 共通教育部

Co-creation of a Story in Conversation

Kishiko Ueno*

Faculty of Liberal Arts and Sciences, Tokyo City University

* Corresponding Author: uenokishiko@gmail.com

概要

本稿では、二者会話において、互いのうなずきのリズムがひきこみ合うなか、相手のことばを繰り返したり、相手の発話を引き取り、その先を展開したりすることによって、一つのストーリーが創り出される現象を論じる。この現象は、異なる者同士が、身体的リズムをひきこんでつながりながらも、個別の一貫性を保ち、また、それ故に生じるズレを埋めつつ、「今ここ」の場的意味を創り合う共創的コミュニケーションの一形態として捉えることができる。

キーワード

共創的コミュニケーション, うなずき, 繰り返し, ひきこみ, ズレ

Abstract

This paper has analyzed a conversational phenomenon whereby two speakers improvise one storyline through repeating, overlapping, and taking over each other's utterances while entraining each other's head nodding rhythms. This phenomenon can be seen as a form of co-creative communication, that is, a dynamic process in which the here-and-now of drama is co-created by the speakers, who are tied together by shared body rhythms. This process is driven by the speakers' continual attempts to fill incessantly emerging gaps between them that are caused by each speaker's coherence, attributable to their identical roles in the conversation.

Keywords

Co-creative communication, Nodding, Repetition, Entrainment, Gap

1 はじめに

共創とは、異なる者同士が、個々の一貫性を保ちながら、頭脳性だけでなく、身体性を参加させて、時々刻々と立ち現われる「今ここ」の場的意味を共有し、共にドラマを創り合うことである[cf. 清水編 2000].

本稿では、人間の根源的かつ普遍的な、そして、最も日常的な営みの一つと思われる会話のなかに、異なる者同士が、各々の一貫性を維持しつつ、身体的リズムをひきこみ合いながら、場的意味を共に創り、共有し、ストーリーを創り合う共創的コミュニケーションの一形態が見られることを示したい。

2 「共話」とうなずき

家族同士の会話であれ、親しい友人同士の会話であれ、ましてや、初対面同士の会話であれば、話題に関する知識や経験の量、ものごとに対する考え方や感じ方等々、あらゆる側面で個々の会話は異なっている。

旧来の主要な会話研究では、会話とは、何を知っているのか、何を考えているのか分からない異なる者同士が、情報を伝達し合い、共有知識を協力して作り上げる行為であるとみなされてきた。こうした見方は、頭脳性を偏重したうえに、やりとりされることばを情報や知識として客体化し、主体から切り離して捉える会話観に基づくものである。

しかし、会話の内側から会話者のはたらきを捉えようとすると、会話を情報の伝達や共有知識の形成とす

る旧来の見方では説明がつきにくい現象がある。一例として、以下のようなやりとりが挙げられる。

(1)

- 1 A: カラスぐらいおっきいと、けっこう
- 2 B: びびるよね
- 3 A: なんだろ、うん、人間ばいとは言わないけど、動物って感じだった
- 4 B: しかも黒いしね

(1) は、A と B による二者会話において、A が路上で死にかけのカラスに出くわした経験を語る場面からの抜粋である。A の話を聞いている B は、A が見たであろう光景をあたかも自分も見たかのように、「びびるよね」(2行)、「しかも黒いしね」(4行)と A の発話を引き取って言っている。A と B が交代で発した四つの発話をつないでみると、「カラスぐらいおっきいと、けっこう、びびるよね、なんだろ、うん、人間ばいとは言わないけど、動物って感じだった、しかも黒いしね」(下線部が B の発話)と、二人で一つのストーリーを紡ぎ出していることが分かる。これは、情報を伝達し合うコミュニケーションではなく、ストーリーを共に創り合うコミュニケーションと言えるものではないだろうか。

上のような現象は、水谷[1993]によって「共話」と称されてきた。共話の特徴は、相手の発話の先を察し、補って言うことによって、複数の会話者の発話が渾然一体となって一つの流れを生むというものである。植野[2016]は、共話の特徴が顕著に現れ、相互の発話が融合的に展開するやりとりを「融合的談話」と呼び、それを構成する発話現象として、相手と同じことばを言う「繰り返し」、相手が言いそうなことを先取りして言う「先取り」、相手の発話に強く関連することを付け加えて言う「付け加え」、相手の発話の一部に自分の発話を重ねて言う「言い重なり」があることを指摘している。

共話は、日本語会話に頻繁に観察されるものであり、各々が自分の発話を完結させながらやりとりを進めることが多い英語会話の「対話」としばしば対比される。

日本語会話の共話的性格を支えるものの一つとして、英語の約三倍の頻度を数えるという「あいづち」、および、「うなずき」がある[喜多 1996, メイナード 1992 他]。あいづちとは、命題内容を含まない短い表現(日本語: 「うん」、「ふうん」、「そう」等, 英語: “Uh-huh,” “Yeah,” “Hmm” 等)を指す。うなずきとは、首の縦振りのことであり、「身振りのあいづち」[杉戸 1989]とも呼ばれて

いる。会話参加者は、なかば非意識的に、あいづちを打ったり、うなずいたりしながら、「同調のリズム作り」を行っている。

メイナード[1992]は、日本語と英語、それぞれ 120 分の会話におけるうなずきを分析し、英語会話では、うなずきの約 92%が、相手の話を聞いているときに、話の継続を促す「続けてシグナル」として用いられていたのに対して、日本語会話では、相手の話を聞いているときのうなずきは全体の約 67%に過ぎず、残りの約 33%は自分の発話に伴って起こり、さらには、二度三度と一定のテンポで連続するうなずきや、二人のあいだで同期するうなずきが特徴的に見られることを明らかにした。

理工学の分野からは、対面コミュニケーションにおける身体的リズムのひきこみ、同調に関する多くの研究結果が報告されている。渡辺ら[2000]によれば、聞き手は話し手の発話の区切りを予測して一歩先にうなずく。このことは両者のあいだにひきこみが起きていることを示している。また、聞き手が話し手の発話開始直後や発話終了時にうなずきを入れることにより、円滑なコミュニケーションが可能になることも指摘されている[菊地・白井 2000]。さらに、対面コミュニケーションにおけるひきこみ現象は、うなずきだけではなく、まばたき、身振り・手振り等を含む非言語的行動、および、呼吸、心拍変動等の生理的側面にも起こり[渡辺 1999, 渡辺・大久保 1998]、そうした生体リズムのひきこみは、発話タイミングや発話長、発話間隔にも深く関わっていることが確認されている[三宅他 2004]。身体的リズムのひきこみ、同調による身体性の共有は、人間の基本的な能力であり、それによって一体感が生まれ、他者とのつながりが実感されると考えられている。

理工学分野の研究は、多くの重要な知見をもたらしてきたが、高度に制御された実験に基づくものであり、うなずきの生起と発話内容や文脈との関わりについては扱っていない。次節では、二者による自然会話をデータとして、うなずきと発話内容、文脈の関わりに注目しながら、二人でストーリーのクライマックスを創り合う過程を分析する。

3 ひきこみ合う発話とうなずき

初対面の女性ペア 13 組に「びっくりしたこと」というテーマを与えて、約五分間自由に会話をしてもらい、録音・録画のうえ、書き起こしをした[cf. 井出・藤井編 2014]。その談話データのなかから、一つの会話(「カレーライスの話」)を取り上げる[cf. 植野 2018]。

(2) の 1 行目で二人のうち一方が、「えーと、私アルバイトをしていて」と、経験を話し始める。経験を話す

者を「語り手」とし、その話を受ける者を「聞き手」とする。

(2)

- 1 語り手：えーと、私アルバイトをしていて
- 2 聞き手：[<あ><あ>
- 3 語り手：[この近くに喫茶店があるんですけど =
- 4 聞き手： =<あ>
 <あ>=
- 5 語り手： =/そこで、そのの、こう、なんだろ、推薦、
 え、推薦、え、薦めてるメニューの1つ[が
- 聞き手： /<><>
- 6 聞き手： [<う
 [ん>
- 7 語り手：[カレーライスっていうのがあるんですよ

聞き手は、語り手の発話開始直後や発話終了時に、うなずき(<>)で示す。深い大きいうなずきは<<>>で示す。)を入れながら(2・4・5・6行)、「アルバイト先の喫茶店のお薦めメニューにカレーライスがある」という話を聞いている。ここでの二者は、語る者、聞く者という非対称的な関係にあり、うなずきは聞き手の側のみ起こっているが、聞き手が発するうなずきのリズムは、語り手に伝播し、徐々に感応し合っていくものと思われる。このあと、語り手は、「ラグビー選手である男友達がカレーライスを食べにきて、その食べる量が半端じゃなくてびっくりした」という話をする。

(3)は(2)の後続部分である(8行~43行省略)。

(3)では、(2)とは打って変わって、聞き手だけでなく、語り手の側にも高頻度のうなずきが起こっている。双方から打たれるうなずきのリズムにのって、短い発話の瞬発的なかけあいが展開し、瞬く間にストーリーのクライマックスの共創へと進んでいく。

大まかな流れを見ておこう。44行において、語り手は、喫茶店のマスターがご飯をよそう様子を描写し、男友達がいかに沢山の量を食べたかを表そうとしている。映像データでは、語り手が「ドーン」と言いながら両手で大きな山の形をつくったあと、臨場感たっぷりに杓文字を持ってご飯を盛り付ける身振りをしている様子が確認できる。

続いて、44行で、語り手が、(喫茶店のマスターが)「お釜に残っていたご飯を全部入れてくださって」と言うと、45行から47行にかけて、二人のあいだで「優しい」ということばが三回繰り返され、「優しいお店の人」というアイディアが生まれている。さらに54行から58行では、二人の交互の発話により、「普通に全部、それでぺろっと平らげちゃったの、そうなんですよー、なんか、恐ろしい、さすがラグビー部は違う、違うんで

すよねー」(下線部が聞き手の発話)と、ストーリーのクライマックスが創り出されている。

(3)

- 44 語り手：したら、また、ドーンて、きて、/なんか、お釜に残ってる、ご飯全部入れてくれ、[くださって/<<>>
- 聞き手： /<><>
- 45 聞き手： [<あ、ん
 >
 /(.) 優し<<い>> {笑} =
- 46 語り手： =<優[し>いんです
 {笑}
- 47 聞き手： [優しいお店の人
 だ
- 48 語り手：<そう><なん>です {笑}
(省略).....
- 52 語り手：[それを、/持って来てもらっ[て<><>
- 聞き手： /<><>
- 53 聞き手： [<う><ーん>
- 54 語り手：/<はい>、普通[に全部
 聞き手：/<><>
- 55 聞き手： [それでぺろっと<平ら>[げちゃっ
 た<の>?
- 56 語り手： [<そう>
 なんですよー、なん[か
- 57 聞き手： [恐ろしい、さすがラグビー部
 は
 /<><>違[<う>
- 語り手：/<>
- 58 語り手： [違[う]んですよねー

「優しい」の繰り返しから、ストーリーのクライマックスに至るまで、うなずきと発話はどのように起きているのだろうか。

まず、45行から47行における「優しい」の繰り返し、および、うなずきに注目してみよう。聞き手は、話し手の発話(「お釜に残ってる、ご飯全部入れてくれ、くださって」)(44行)の終了部に重なって、「<あ、ん>(45行)とうなずいている。そのうなずきにひきこまれるように、語り手も大きくうなずいている(44行)。聞き手は、その語り手のうなずきに合わせて間をとったあと、いたく感じ入った様子で、「優し<<い>>」と大きくうなずいて言う(45行)。すると語り手は、間髪おかず、「<優し>いんです」とうなずきながら言い(46行)、聞き手もまた、それとほぼ同時に「優しいお店の人だ」と「優しい」を繰り返して言う(47行)。

このように、一方のうなずきが他方のうなずきを誘

い、身体的リズムをひきこみ合うなか、「優しい」が重なり合いながら繰り返され、音声的、形式的に特徴付けられたことばのリズムが生まれる。そして、「優しいお店の人」という、語り手でも、聞き手でも、どちらのものでもあるような思いを織り込んだストーリーが創り出されている。

次に、52行から58行にかけてのストーリーのクライマックス創出のやりとりを見てみよう。ここでは、二人のうなずきが三回集中して同期している（52行の語り手と53行の聞き手、54行の語り手と聞き手、57行の語り手と聞き手のうなずき）ことから、二人の身体的リズムは、より一層ひきこみ合い、深いレベルで同調しているものと思われる。

そうした状態にあって、聞き手は、語り手の「普通に全部」（54行）に言い重なり、「それでぺろっと<平ら>げちゃった<の>?」（55行）とうなずきながら先回りして問いかける。そのうなずきにひきこまれるように、語り手もうなずき、「<そう>なんですよー」と同意する。

続いて聞き手は、語り手の「なんか」（56行）の先を引き取って、「恐ろしい、さすがラグビー部は」と言ったあと、二つうなずいて拍子を取り、ドラマチックな抑揚をつけて「<>>>違<う>」（57行）と言う。語り手は、聞き手と一緒にうなずいたあと、「違<う>んですよねー」（58行）と、ほぼ同時に声を重ねて同じことを言う。このように、ストーリーのクライマックスは、互いが強くひきこみ、うなずき合うなか、語り手からではなく、聞き手からもたらされた発話を中心として完成している。

Hall[1984]によれば、相互の身体的リズムが織りなす目に見えない網によって人と人がつながることで、瞬発的な反応の連鎖が可能になる。(3)においては、互いの発話に重なりながら、瞬発的に同じことばが繰り返され、ついには、相手の発話の先を展開することばが発せられて、相補的に一つのストーリーが創り出された。それは、まさに、うなずきのリズムが織りなす目に見えない網によって語り手と聞き手がつながって、時々刻々と立ち現われる「今ここ」の場の意味を共に創り、共有して、それを吹き込んだストーリーを生み出していく、共創的コミュニケーションの一つの形とすることができるだろう。

上に見たようなコミュニケーションの形は、ディベートのように相手の言い分を打ち負かすことや理性的に論理を追求していくことを目的とした会話というよりも、互いが自由に発話しながら、一つの合意に向かう会話[井出・植野 2012]や、日常の何気ない共感的、交感的な会話に起こりやすいと思われる。また、相方の語

りのリズムの同調しながら、あいづちを打ち、同じことばを繰り返し、話を先取りして、観客の笑いをとる話芸としての「漫才」などにも見られるものである[井出 2013]。

4 共創を促す個の一貫性と二者間のズレ

語り手と聞き手が身体的リズムを共有し、一つのストーリーを共創する会話の一場面を見てきたが、この共創的コミュニケーションを推し進める原動力の一部には、一見矛盾するようではあるが、二者それぞれの異なる立場が一貫して維持されるために生じるズレがあることを言語的観点から指摘したい。

二者の異なる立場とは、語り手は、カレーライスが出来事を経験し、その実情を知っている立場にあるが、一方、聞き手は、出来事を経験しておらず、その実情を知りえない立場にあるということである。この両者の異なる立場が、発話において、一貫して「のだ」を使う語り手と、一貫して「のだ」を使わない聞き手という、個別の一貫性をもたらしことになる。

(3)の一部再掲)

- 45 聞き手： [あ、ん
>
/(.) 優<し><<い>> {笑} =
- 46 語り手： =<優<し>い<ん>です
{笑}
- 47 聞き手： [優<い>お<店>の人
だ
- 48 語り手：<そう><なん>です {笑}
.....(省略).....
- 54 語り手：/<はい>, 普通<に>全部
聞き手：/<>>>
- 55 聞き手： [それでぺろっと<平ら><げ>ちゃっ
た<の>?
- 56 語り手： [<そう>
なんですよー, なん<か>
- 57 聞き手： [恐ろしい, さすがラグビー部
は
<>>>違<う>
語り手：/<>
- 58 語り手： [違<う>んですよねー

「優しい」の繰り返しから、ストーリーのクライマックスの共創に至る過程において、語り手の発話は、「優<い>い<ん>です」（46行）、「そう<なん>です」（48行）、「そう<なん>んですよー」（56行）、「違<う>んですよねー」（58行）

のように、常に「のだ」を伴っている（「んです」の「ん」は助詞「の」の転。「です」は断定を表す助動詞「だ」の丁寧形）。

一方、聞き手の発話は、「優しい」（45行）、「優しいお店の人だ」（47行）、「恐ろしい、さすがラグビー部は違う」（57行）のように思いや判断をそのままに述べる形や、応答を求める問いかけ（55行）の形をとり、「のだ」は一度も出てこない。

「のだ」には、あることがらを受けて、その内実はこういうことだという「背後の実情」を表す機能があり[田野村 2002]、また、その表現を文脈に強く結びつける効果をもつ[川本 1976]。これに基づけば、カレーライスが出来事の実情を知る語り手は、「のだ」を添えて聞き手のことばを繰り返したり、承認したりすることによって、聞き手が発したことばに、背後の実情を添え、また同時に、実情を知りえない聞き手の不完全さを受け入れ、包み込むようにして、聞き手のことばをストーリーに強く結びつけているものと解釈される。

やりとりを詳細に見てみよう。お釜のご飯を全部入れてくれたというマスターについて、聞き手が、「<あ、うん>（.） 優し<<い>>」（45行）と感情的に思いを表すと、語り手は「<優し>いんです」（46行）と、「優しい」に「のだ」を付加して応じている。そうすることで、語り手は、聞き手が発した「優しい」という思いをそのまま受け入れるとともに、「マスターは実際に優しいのだ」という実情を明かしつつ、聞き手からもたらされた「優しい」をストーリーにしっかりとなじませていく。

このあと、聞き手は、「優しい」をさらに繰り返して、「優しいお店の人だ」（47行）と、「優しい」に「お店の人だ」を加えて言っている。聞き手は、マスターを直接知る語り手の立場を尊重しつつ、「優しい」という二人で共有する思いに断定的なサポートを与えたものと考えられる。

続いて、語り手は、聞き手の「優しいお店の人だ」（47行）に対して、「<そう><なん>です」（48行）と、「優しい」を「そう」という指示詞に変換し、そこに「のだ」を添えて言う。そのようにして、語り手は、直接マスターのことを知る立場から、再度、「実際に優しいお店の人なのだ」という背後の実情を示すと同時に、「優しい」の繰り返しを終わらせ、次の段階へと舵をきるのがある。

ストーリーのクライマックスが創り出される局面（54行～58行）に目を移してみよう。ここでも、「のだ」を使う語り手と、「のだ」を使わない聞き手という各々の一貫性が維持されている。

聞き手の「それでぺろっと<平ら>げちゃった<の>?」

（55行）に対して、語り手は「<そう>なんですよー」（56行）と返している。さらに、聞き手の「恐ろしい、さすがラグビー部は<<>>違<う>」（57行）に対して、語り手は、「違<う>んですよねー」（58行）と応じている。語り手は、「のだ」を用いることで、聞き手による二つの発話の背後の実情を表しながら、その発話の内容を「カレーライスの話」のクライマックスとして承認したのである。

注目されるのは、ここでの語り手の発話に、終助詞「よ」（56行）と「よね」（58行）が伴っていることである。「よ」には、ことがらを「認識すべきもの」として示す機能があり、「よね」には、ことがらを当然のこととして示し、相互理解を確認する機能がある[宮崎他 2002]。これによれば、語り手が、聞き手の「それでぺろっと<平ら>げちゃった<の>?」（55行）を受けて「<そう>なんですよー」（56行）と「よ」を添えて言ったのは、聞き手に対して、「ぺろっと平らげちゃったのだ」という実情を認識すべきだ、という気持ちがあったためと解釈される。また、聞き手の「恐ろしい、さすがラグビー部は<<>>違<う>」（57行）に対して、語り手が「違<う>んですよねー」と、「よね」を添えて言ったのは、「違<う>のだ」ということを当然のこととして示し、相互理解を促したためと言える。

実情を知りえない聞き手によってもたらされたストーリーのクライマックスの核となる発話に対し、語り手は、自分だけが出来事の実情を知っているという立場を堅持し、さらに、出来事の実情を当然のこととして聞き手も了解するべきだ、という気持ちを顕示したのである。

「優しい」の繰り返しからストーリーのクライマックスの共創に至る両者の発話は、密接に重なり、つながって、渾然一体となって一つの流れを創り出しているが、その奥には、実情を知っている語り手と、実情を知りえない聞き手という異なる立場に基づいたそれぞれに固有の一貫性と、それ故に生じるズレを常にはらんでいる。そして、そのズレ自体が、新たな発話を生み出す動機でもある。固有の一貫性を維持しようとする志向性と、それ故に生じるズレを埋めようとする志向性という、矛盾した二つの志向性を抱えながら、ストーリーは発展していく。

5 結言

一例の二者会話を挙げて、初対面の二人が、相互のうなずきにより身体的リズムをひきこんで同調し、一つのストーリーを共に創り合う共創的コミュニケーションを示してきた。ここで行われているのは、情報を伝達

し合い、共有知識を作り上げるコミュニケーションではなく、互いのリズム、存在を感じ合い、「今ここ」の場の意味をことばにのせて共に創り、共有する一瞬一瞬を享受するコミュニケーションである。

このような共創的コミュニケーションの根底では、語り手と聞き手それぞれの一貫性、個別性を保つこと（異化）、それによって生じるズレを埋めること（同化）の両方がせめぎ合い、バランスをとっては、崩れていくというサイクルが起こっている。

二人で一つのストーリーが共創される時、そこに、身体的リズムのひきこみ、同調があるのは、何を意味するのだろうか。身体的リズムのひきこみは、うなずきをはじめとして、まばたき、身振り、さらには、呼吸や心拍変動といった生理的側面にも起こっているという[渡辺 1999, 渡辺・大久保 1998]。人間の身体は、自然のリズムを宿している[三木 2013] と言われることから、人と人が身体的リズムをひきこんで同調するとき、そこに自然のリズムとの同調があると考えてもよいのではないだろうか。二人で一つのストーリーを創り合う共創的コミュニケーションには、身体的リズムを共有した語り手と聞き手を包む、より大きないのちとしての自然の作用がはたらいているものと思われる。

謝辞

本研究は、井出祥子氏、藤井洋子氏、大塚正之氏らを中心として構築してきた「場の言語学」に基づいて着想したものである。本研究は JSPS 科研費 15H03208 および 17K02746 の補助を受けている。本稿に対し編集者、査読者諸氏より貴重なコメントを頂いた。ここに謝意を表したい。

付記

本稿で使用した文字化表記法は以下の通りである。

- [音声为重なり始めている時点を示す。
- = 二つの発話が途切れなく密着していることを示す。
- / うなずきが観察された箇所を示す。
- <> うなずきを示す。

- <<>> 深い大きなうなずきを示す。
- {笑} 笑いを示す。
- ? 上昇イントネーションを示す。
- () 短いポーズを示す。
- 繰り返される語を示す。

参考文献

- Hall, E. T. (1984). *The Dance of Life, Anchor*.
- 井出祥子, 植野貴志子 (2012). 場の理論で考える配慮言語行動, 三宅和子, 野田尚史, 生越直樹(編), 「配慮」はどのように示されるか, ひつじ書房, 29-50.
- 井出祥子, 藤井洋子(編) (2014). 解放的語用論への挑戦: 文化・インターアクション・言語, くろしお出版.
- 井出里咲子 (2013). ナラティブにおける聞き手の役割とパフォーマンス性, 佐藤彰, 秦かおり(編), ナラティブ研究の最前線, ひつじ書房, 43-64.
- 植野貴志子 (2016). 融合的談話の「場の理論」による解釈, 待遇コミュニケーション研究, 13, 18-34.
- 植野貴志子 (2018). 聞き手行動の「場の理論」による解釈, 村田和代(編), 聞き手行動のコミュニケーション学, ひつじ書房, 11-31.
- 川本茂雄 (1976). 日本語の文法の特徴, 金田一春彦(編), 日本語講座 第1巻 日本語の姿, 大修館書店, 55-89.
- 菊地英明, 白井克彦 (2000). 対話公立の向上を目的とした音声対話制御のモデル化, ヒューマンインタフェース学会論文誌, 2(2), 145-152.
- 喜多壮太郎 (1996). あいづちとうなずきからみた日本人の対面コミュニケーション, 日本語学, 15(1), 58-66, 明治書院.
- 清水博(編) (2000). 場と共創, NTT出版.
- 杉戸清樹 (1989). ことばのあいづちと身振りのあいづち—談話行動における非言語的表現, 日本語教育, 67, 48-59.
- 三木成夫 (2013). 内臓とこころ, 河出書房新社.
- 水谷信子 (1993). 「共話」から「対話」へ, 日本語学, 12(4), 4-10, 明治書院.
- 三宅美博, 辰巳勇臣, 杉原史郎 (2004). 交互発話における発話長と発話間隔の時間的階層性, 計測自動制御学会論文集, 40(6), 670-678.
- 宮崎和人, 安達太郎, 野田春美, 高梨信乃 (2002). モダリティ, くろしお出版.
- メイナード・K・泉子 (1992). 会話分析, くろしお出版.
- 渡辺富夫 (1999). コミュニケーションにおける身体性, ヒューマンインタフェース学会誌, 1(2), 14-18.
- 渡辺富夫, 大久保雅史 (1998). コミュニケーションにおける引き込み現象の生理的側面からの分析評価, 情報処理学会論文誌, 39(5), 1225-1231.
- 渡辺富夫, 大久保雅史, 小川浩基 (2000). 発話音声に基づく身体的インタラクションロボットシステム, 日本機械学会論文集(C編), 66(648), 251-258.